

薪ができたなら今度はそれをストックしておかなければならない。田舎暮らしの家の軒下に薪を積んであるあれだ。両端に積む薪の高さにあつた支柱を立てそれを支えに薪が崩れないように積むようだ。ところが、最初の年に買った薪を運んできた人たちは、そんな準備をしていない我が家の軒下にいとも簡単にヒヨヒヨいと積んでいく。それでは崩れてしまうだろうと思つたが、そこは積み方にちよつとした工夫があつた。両端の薪を積む時にところどころ横向きに薪を積みそれをちよつと内側に傾いたようにセットするのだ。そうすることによつて、両端の薪は内側に転がる力が働いて互いに突つ張り合い崩れることが無いのだ。

翌年、試しに同じ方法で積んでみたが意外と難しい。どうしても両端が積むうちにだんだん内側に傾いてきて美しくない。支柱が無いのに両端がまっすぐ積み上がっているのが美しいので、そうでなければ単に積んだだけに見える。まあ、人に見せるものではないのだが自分的に納得がいかない。横向きに積む薪を少し外側にせり出させるとなんとかそれらしくなつてきた。

次の問題は、どこに積むかだ。冬の便りが届く頃には、薪ストーブの置いてある土間から軒下伝いに行き来できる縁側に積むと便利で、一応、一冬で焚く薪の量を積むことができる。ただ、夏の間とか季節の良い時に縁側が薪に占領されているのはいただけくない。幸い、敷地は広いので積むところはどこにでもあつた。ちょうど食卓の窓から見える木々の一角に積んでみることにした。

都心のマンションのベランダで使つていたすのこ板を下に引いて地面からの湿気が薪を腐らせないように自分なりに考えてみた。そこは野ざらしになるので積んだ薪の上にポリカーボネートの波板を乗せ雨も防ぐことにした。その屋根を固定するのに木の枝を乗せ、縄で下のすのこ板に結びつけた。我ながら立派なものできたと思ひ自賛。食卓の窓から遠くにオブジェのように見えるのも悪く無い。

妻が「それを木熊(きぐま)と呼ぶことがある。」と教えてくれた。木々に囲まれて立つ姿は、熊と言われればそう見えなくもない。それに「薪を積んだ」というよりも「木熊をつんだ」という方がなんとなく様になる。すつかりこの木熊という言い方が気に入つて、まわりの人に言いふらしていた。

そのように調子に乗っていると足を掬われるのが常である。

一年、風雨と雪に晒された木熊は、縄が切れ屋根は飛ばされ、すのこ板の効果などどこえやらという感じで下の薪が腐りかけ、凸凹した地面のままに積んでいたのであちこち崩れてしまった。厳しい自然に耐えた老熊の威厳は、少しも感じられず、単に素人の薪積みの悲しい末路を晒すことになった。

すつかり野のなかでも薪積みに自信を無くし、大人しく縁側とは反対の屋根の下に支柱付きの薪積み台をつくつてそちらに大人しく積むことにした。そんな時に、町内のKさんから「どこかで円形に薪を積んでいるのを見たよ。ああいう積み方もあるんだね。」と言われた。



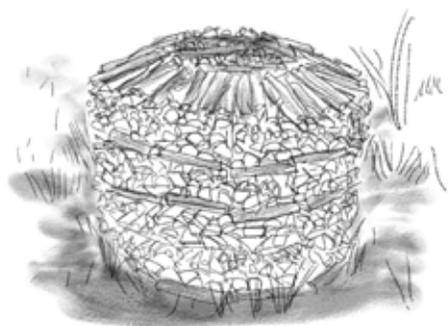
薪を円形に積むというのはどういふことか、さつそく調べてみた。シベリアで見たとか、スイスで見たとかいろいろある。「スイス積み」という名前もよく出てくるのだが、あちらでは「holz hausen=木の家」と言うらしい。積み方を教えてくれるテキストや動画もいろいろあるが、それらによると薪を円形に並べて積んでいき、円の内側の空洞にも薪とか枝とかを詰めていくというシンプルなものだ。これならできそうだし、形も悪く無い。基本は円筒形なのだが、ものによっては上にいくほどゆるやかに広がっているものや逆に狭まっているのとか形は微妙に個性がある。また、薪のいろいろな形の断面が円のカーブに沿って表情をつくっているのも良い。なかには枝だけで積んでいるのもあつて大小の丸で壁ができているのはちょっとしたアートだ。

さて、どこに積むか。こんな形なら草や木々に囲まれたところにこそ似合う。昨年の反省も造形美への憧れの方が優つてしまうのは困つたものだ。場所を決めたら円形に草を刈りさつそく積み始める。昨年の経験のあるし、少しぐらい凸凹があつた方が味が出るような気がして、直線上に積み上げるより精度が要求されない分、楽だと思つた。ところが思わぬ落とし穴があつた。やはりね。

円筒形に積むということは、筒の内側の円と外側の円では長さが違わねくはいけない。ほぼ同じ幅の薪を積んでいくとなると、どうしても扇状に外側が開いてしまう。その外側の隙間を埋めるように次の薪を積んでいくと徐々に外側に傾いた状態になってしまうのだ。そのまま積み続けるとどんどん傾斜は急になり積んだ薪が滑り落ちてしまう。積む薪の傾きの調整は、昨年の木熊積みでやった方法を応用し、ところどころ外側の円に沿つて横向きに薪を置き、それを枕にして次の薪を積むことにした。そうすると外側への傾斜は修正され地面と平行に戻るのだ。そうやってどんどん積んでいったら、中の隙間に薪や枝を入れて崩れにくくしなくてもいけそうだった。

出来上がった円形の木熊はなかなかの造形で、環境アートのようだった。若い頃に好きだったニルス・ウドとかアンディー・ゴールズワージーといったアーティストの名前が思い出されて、一人世界に浸つてしまった。夕暮れになったらランタンを持ち出して円筒形の筒の中に置いて、木熊にできたたくさん薪の隙間から漏れる光を楽しんだりもした。そんな木熊も冬はすっかり雪に埋もれて雪の小山になってしまったが、それも季節の風景のひとつとなっているのでよしとしていた。

そんな思いは、春の雪解けとともに消えて後悔だけが残つた。雪の小山から出てきた木熊はデジャブのように昨春の無残な姿に似てあちこちの薪が崩れてしまつていた。さらに設置した場所が最悪で、春の雪解け水にすっかり浸つてしまい地面に近い方の薪は見るからにそう遠くない先に土に還らんとしていた。草や木々に囲まれた場所に木熊が凜と立つ姿は風景としては心を打つものがあるが、良い薪をつくるという視点からは最悪だと二度目にしてようやく納得することになった。



同じ過ちを繰り返さないように木熊は絵になるかどうかより水はけの良いできるだけ平らな場所を選ぶことにした。そうなると適地は限られる。家を建てるための重機を入れられるようにつくった駐車場は厚く碎石を敷き詰めているので水はけもよく条件は満たしているのだが、なんせ殺風景の上ない場所なのだ。植物を植えようにも碎石を掘り返して土を入れなければならぬので手が出せないままでいる。そんなところに木熊を積んでもなあという気持ちは捨てて実を取らなければ冬場の良い薪が手に入らず薪を買い続けなければならぬことになる。

それに、この頃になると町内のMさんが、「石塚さん、薪にする木はいらないかい。」としきりに声をかけてくれるようになってきた。あちこちから「冬になる前に、この木を切っておいて欲しい。」という依頼があつて、切った木の始末に困っていたこともあるのだらうけれど、ありがたい話で断る理由がなかった。そういうしているうちに秋も深まるころには、大小の丸太や枝が敷地に山積みになってしまい、それをなんとかしなければ冬の除雪に支障が出る状態になったという事情も後押しした。

積む場所を決めるのも周りの風景など手がかりがないので、とりあえず車の出入りの邪魔にならないところにした。場所が決まればこれまでの試行錯誤の積み重ねがあるので手早く積むことができた。いただいた丸太などで薪はたくさん出来たので、結局、三基つくることになった。それに、作り方の情報にならなくて木熊の中の空洞は細い枝をぎっしり詰めて崩れにくくしてみた。

出来て見ると、これまで見て見ぬ振りをしてきた殺風景な駐車場に何かしら表情が生まれてきた。特に、そのうちの一つを枝を主に積んだ木熊にしてみたのだが、これが柔らかな曲面をつくってなかなか良いのだ。木熊の姿が映えない場所だと思っていたが、逆に木熊が風景をつくる力があつたということだ。

よくデザインされたランドスケープというのはいろいろある。特に田舎暮らしとガーデニングは対のような関係に捉えられる。しかし、この湿地同然であった敷地で絵に描いたようなガーデニングは無理だし、そもそもあまりする気もなかった。一方で、日々の生活の中で必要とされるものが巧まずに優れた風景をつくるということがある。小さな農村や漁村には、そのような風景をまだ見ることができが、ここ竹山でのランドスケープデザインのひとつの方向性が見えてきたような気がした。

一冬越して、春先になっても水に浸ることもなかったし、崩れてもいなかった。少し気温も高くなり始めた頃、枝を積んだ木熊の足元から小さな動物が顔を出しているのを見つけた。野ネズミだ。ネズミといっても大型の灰色のネズミではなく、小型で茶色の愛らしい表情のネズミである。そのネズミは木熊の中から周りを伺うとちよこちよこ足早に外に出てきた。と、続いてその後を追うようにもう一匹。さらにもう一匹。この木熊は冬場暖かく安全に暮らせるネズミ一家の住処になっていたのだ。これはまずい。

